INTERVIEW：インタビュー

柳澤信成さん（右），子息の柳澤孝栄さん（左）

小さな楽器の修理店から始まり，125年の歴史を有するヤナギサワ。昭和26年に先代がサクソフォン作りを始めてから，サクソフォン一筋で全て手作業での楽器作りを貫いてきました。板橋区にある工場から世界の表現者たちへサクソフォンを届けている柳澤さんの語る楽器作りとは――。

聞き手・構成：濵島 幸子

柳澤管楽器株式会社 代表取締役社長　柳澤 信成さん

―― 数ある楽器の中でサクソフォンという楽器に注目された理由はありますか。

当社は父の代からサクソフォン作りを始めたのですが，父が独立する際，楽器作りの先達でもあったムラマツフルートの創始者・村松孝一さんから「お前は何を作りたいんだ？」と聞かれ，咄嗟に「サクソフォン」と言っちゃったのが始まりです。ただ，父はいろいろな楽器を作りたいという気持ちから「柳澤管楽器株式会社」と，「管楽器」という言葉を社名に掲げました。ところが最初に作り始めたのがサクソフォンで，理想のサクソフォンの追求はまだ道半ば。自分たちがもうこれ以上ないと満足するものが出来上がらないと，そこから離れられないでしょうね。

―― 先代から家業を引き継ぐきっかけは何だったのでしょうか。

無理矢理です（笑）。私は絵を描くことが好きで美大に行きたかったのですが，簡単には入れず，これからどうするのかと問う父に「美大に行かせたと思って4年間遊ばせてくれ」と言ったら，「何を考えているんだ，明日から会社に来い！」と怒られました。父はおっかなくて，行かないと何を言われるかわからないし，行っても嫌々仕事をやっていると，結局怒られるわけですね。ただ，しばらく物作りをやってみると，意外と面白いなと思うようになりました。

―― 親子でやることの難しさはありましたか。

それはありましたね。例えば，私が楽器のある部分をこんなふうにしたらどうか？と提案してみても，父はそれをほとんど却下。今思えば私の考えが至らず却下されただけのことだったのですが，なんだか反抗的になってしまったり，父も私を育ててやろうという気持ちで向き合ってくれていたのでしょうけど，相手が息子なのでつい言い方がキツくなってしまったり…。よく「息子にとって，父とは永遠のライバルであり，乗り超えるべき存在」などと言われますが，私にも，それゆえの反発心のようなものがあったのだと思います。

―― 全て手作業での楽器作りを貫いている一番の理由はなんでしょうか。

それは，楽器という「形」だけではなく，そこから出てくる「音」を作っているという意識を大切にしているからです。音には「音質」と「音色」という要素

があり，楽器そもそもが持つ音質に，いかに自分ならではの音色を掛け合わせて多彩な音の表情を作り，自分の音楽を描き出してゆくか。奏者はそうやってつねに自身の音楽表現を追求しています。そのため，楽器の作り手である我々も，その音質の部分を追い求めていく。その際，機械ではなく人の手でなければならない領域が出てくる。それが手作りにこだわる理由であり，楽器作りというものだと思っています。

若いころ，父が酔っ払って「お前，楽器は生きているんだぞ。だから愛情を持って作らないと」と言っていたことがあります。当時はその言葉の意味がわからなかったのですが，今ならよくわかる。「いいものになれよ」と愛情をかけて仕事をするのと，ただお金がもらえるからやるのとでは，出来てくるものが全然違ってくる。そこを大切にしたいですよね。

── ヤナギサワでは演奏家支援もされていますが，奏者の方々にはどんな思いをもっていますか。

ヤナギサワの楽器を，自身の音楽表現を追求するための一部として選び長年吹いてくださっている皆様には感謝しかありませんし，できるだけの応援をしたいと思っています。ただ，それはお金の関係になってはならず，人と人とのお付き合いをしていきたいと思っています。そうじゃないと，我々の楽器についてアドバイスを求めたとき良いことしか言ってくれなくなってしまいますので。我々にとって一番役に立つのは「ダメだ」というその言葉。確かに褒めてもらうほうが嬉しいけれど，褒められるというのはその一瞬で終わってしまう。ところが嫌なことを言われると，寝ても覚めても，「あのときあんなことを言われたな，次はそう言われないようにしてやる！」という思いを延々と持ち続けることになります。そのことが，どうやったらいい楽器が出来上がるだろうか，いい音がするだろうかという，いいチャレンジにつながっていくんです。

とはいえ，演奏家というのは感覚的な言葉が多いんですよ。「もう少し音に輪郭がほしい」とか。それから「この音をこうしたい」とかではなく，「一つ一つの音には顔があって，自分が右向け右と思ったとき，この楽器にはさっと右を向いてくれないやつがいてバラバラしている」なんて言われたこともあります（笑）。

── それは確かに理解するのが難しいですね。奏者によって音の好みや特徴があるので，全てに応えるのは難しいのではないですか。

難しいですね。一つのジャンルだけに合わせると，他のジャンルには合わない場合が出てくる。例えば，ビッグバンドなどのジャズ系のテナー・サックスというのは花形なんですよ。もう大きい音を出してブイブイ言わせていく。ところが，クラシックのテナー・サックスは，中低音域の真ん中に入ってハーモニーを整えていく役になります。それを同じ楽器でやっていくというのはなかなか難しい。でも，本当にいい楽器を作ればそれが両方できると私は思っています。

── 最近の演奏家や楽器作りの傾向のようなものはあるのでしょうか。

今の最前線にいる若い人たちはとても高度な演奏技術を持っていて，非常に前衛的で難解な現代曲にもどんどんチャレンジしていきます。でも中にはハチャメチャなものもある。例えばクラシック音楽は，長い時間をかけて受け継がれてきた芸術です。様々な作品が生み出された中で，時代を超える強さのあるものが現在に残っているわけですが，誕生した当時は先進的であり，その最先端にはやたらと変なものもいっぱいあったと思います。現代においても，時代の最先端だけに合わせていると，とんでもないことばかりやっているようになってしまう。それがいいのか悪いのかという問題は別としましてね。

同様に楽器作りも，そういう方向にだけ合わせようとすると，道具としてとんでもないものを作ってしまう。例えば創作料理みたいなものはそれでいいかもしれないけれど，やはり和食なら和食。根本的に包丁の冴えで刺し身を作って，だしを利かせてものを作っていく。そういった日本人としての良さというものは，絶対に残していくべきだと思うんです。

── 今の先鋭的なサクソフォンというのはどのようなものなのでしょうか。

一つの例としては，ものすごく速いパッセージや奇抜な奏法を多用する現代曲にも対応できるように，地金を薄くして，音が簡単に鳴らせて扱いやすくしたものとかでしょうか。ただ，やはり「サクソフォンの音って

こういうもの」というこれまで培われてきたイメージや理想のようなものがあるので，そこから大幅に逸脱したものについては抵抗があります。テクニックや流行だけに特化した楽器ではなく，しっかり音を聴かせるような道具作りをしていかなくちゃいけないなと強く感じています。

── ヤナギサワではどういう改良をしているのですか。

楽器本体は，試作した際にこれはいいという評価をいただいたとしても，そのまま製品化するかというとそうではない。ゴルフで例えると，プロの使うゴルフクラブはスイートスポットがものすごく小さくて，そこに当てる技術のある人だけが使うのであればいいですが，素人が使うとほとんど当たらない。そのスイートスポットを広くすると，素人でブレたとしてもある程度はいい球が飛ぶわけですね。プロの使うクラブで一番いいところに当てたときの球筋に比べたら劣りますが，素人に作るときにはスイートスポットが広くないと製品にならない。楽器も一緒です。試作したときにこれはいいねというのが出来上がったとしても，製品化したときには90点ぐらいに落とすんですよ。

── わざと落とすんですか。

ええ。ただ，その落とす部分というのは本体そのものではなく，ほかのパーツを変更して吹奏感や抵抗感を調整するといった対応となります。例えば，奏者がもう少し抵抗感がほしいと思ったとき，ネジを一つ変えると抵抗感が増してちょうど良くなるとか，逆にもっと軽やかな感覚を得たい人には，もっと違うパーツをつけたり，ネックを変えてみたりして，本体は変えずとも，パーツを変えることによってそれぞれの好みに合わせていけるよう，自由さを増すような方向に持っていくことができるんです。

── ヤナギサワでは大変珍しい漆を塗ったサクソフォンも作られていますね。

サクソフォンという楽器は，素材である真鍮が空気振動で震えて音になっていくので，地金そのものの響きが本来の響きなのかもしれません。ただ，そのままでは酸化してどんどんくすんでいってしまい製品化できない。そこで，通常は樹脂系の塗料で酸化防止のために塗装してあるわけですが，その塗装の一つとして，漆をやってみたくなったんです。「漆を身に纏ったらどんな音がするだろう？」というのが最初の入り口です。そうして誕生した漆塗りのサクソフォンは，見た目の美しさだけにとどまらず，木管的な音を響かせ，音楽的にも様々な可能性をもたらすことが見えてきたので，もう少し進めてみようと今は取り組んでいます。

── 西洋の楽器に日本古来の伝統工芸である漆芸を使うというところに，こだわりがあるのでしょうか。

そうですね。どうせ作るなら，ただ単に楽器が漆で塗ってあり，絵が描いてあるだけじゃつまらない。素晴らしい漆芸作品は，現在を生きる我々の心を古から続く悠久の時の流れと繋ぎ，さらに未知の時空間へと誘ってくれます。また，見えないところにまで驚くほどの手間をかけ，揺るぎないこだわりを持って作るというその製作姿勢から学ぶことも多い。それを西洋発祥の楽器であるサクソフォンが身に纏うことで，楽器としても，また楽器作りに携わる我々自身にも，新たな可能性が生まれてくるのではないかと思っています。

── ヤナギサワは，セルマー，ヤマハと並んで世界3大サクソフォンメーカーの一つと呼ばれていますが，他社は意識されますか。

当社の製品がよく比べられるのがフランス・セルマーの製品なのですが，サクソフォンという楽器を開発したアドルフ・サックスの工房を引き継ぐセルマーは，もう180年以上作っている。一方，こちらはまだ70年ぐらいしか作っていない。やはり長年やっているところはいろいろなものを持っています。こちらも物作りをするからには他社を真似るのではなく独自なものをやっていこうとするのですが，「見つけた！」と思って調べると，既にセルマーがやっていたりするんです。

── 同じ楽器であることの難しさですね。

とにかくセルマーを追い越していかなくちゃいけない。最近ではいろいろとセルマーに追いついたじゃないとか言っていただくこともありますが，まだまだです。でも，決して「敵」ではなく，サクソフォンという楽器を作る「仲間」なんですよ。一番つまらないの

は選択肢のない世界です。これしかないとなってしまうと，いい味も悪い味も甘いもしょっぱいもない。「私はヤマハが好き」，「私はセルマーがいい」という一方で，「私はヤナギサワが好き」という人がいてもいい。その中で，物作りの連中が切磋琢磨すればいいじゃないかという気がします。

── ヤナギサワは海外との取引も多いですが，海外からアプローチがあることが多いのでしょうか。

多いですね。ただ，楽器を輸出するに当たっては，実際に会って本当に信頼できる人なのか確認し合う，そこから始まると思っています。売っている製品が楽器ですので，何を作っても誰が作っても同じというものではない。できれば専門知識を持っていて，奏者にも親身になってくれる代理店を選んで，ヤナギサワをよく知っている人に売ってもらいたいという思いがあります。当社の代理店である以上はやはり，ヤナギサワを少しでも高めてほしいし，一緒になって育てていってほしい。

── 代理店にもヤナギサワの楽器や奏者を好きでいてほしいということですね。

そうですね。「楽器を作っている」と言うと，何か特別なものを作っているみたいに思われることがあります。でも楽器はあくまで道具。奏者が「この道具だったら私のパフォーマンスがすべて発揮できる，だからこの道具じゃないとダメなんだ」といって選んでくれて，そしてその演奏を聴けたときは，本当に嬉しいですよね。楽器作りって，演奏されて初めて我々の成果が実るわけで，最終工程は演奏してくれることなんです。

── 弁護士とのかかわりも海外取引の関係ですか。

当社は国内外の数十社と代理店契約を結んでいるのですが，すべて手作業で作っているため，一年間に作れる本数は限られています。そのため，そのうちの何本卸せるかは契約で確定しているわけではなく，各年の生産量の影響を受けることになるのですが，海外でどうも意思の疎通ができなくて，フランスの企業から訴えられてしまったことがあるんです。日本では訴えられるなんていうのは何か悪いことをしたときぐらいというイメージなので，訴えられたことがすごくショックで，どうしたらいいかわからない。ヨーロッパとの取引慣行の違いもあって，とにかくこれは個人ではまったく対処できないぞということで，友人から弁護士の方を紹介してもらいました。

── 実際に弁護士と接してみていかがでしたか。

私自身は，弁護士ってすごく敷居の高いものに感じるんですね。周りにもいませんでしたし，ちゃんと話をしに行くというのは非常に怖かったです。やはり弁護士というと，刑事事件のイメージが強いんですよ。

── 弁護士にどうやってアクセスすればいいかわからないというのも大きいのでしょうか。

そうですね。大勢いらっしゃる弁護士の中で，信頼関係を結べるかという部分で，最初はどなたに頼んでいいか分からない。トラブルを抱えたから弁護士に相談したいということになるのですが，トラブルというのはあまり他人に言いたくないですし，社労士や税理士には気楽に相談できても，弁護士となると急にハードルが上がっちゃうんですよね。日常的な付き合いが薄いからかもしれません。仲間に顧問弁護士を持っているかどうか尋ねてみても，いや，そんなのは敷居が高くて…という話ばかりなので，なかなかお付き合いする機会がないんです。

── 我々も日本の物作りをしている方々に身近に感じていただけるよう努力しなければいけないですね。では最後に，柳澤さんの考える理想のサクソフォンについて教えてください。

音楽というのは人を感動させるもので，人の心を動かすのはやはり，高度なテクニックよりも，歌う心なのだと思います。奏者の方々とともに，その歌う心を追求していけるような楽器を作っていきたいと思っています。

プロフィール　やなぎさわ・のぶしげ

東京都板橋区生まれ。柳澤管楽器株式会社社長。世界の一流品を作ることをモットーに，ソプラニーノからバリトンまで５機種，20種類以上にも及ぶサクソフォン専門メーカーとして国内外に数十社の代理店を有している。